

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和03年 第37回 特別表彰 論文番号:303

論文	著者	所属	評価
<p>【再応募】微小重力空間での定位:宇宙飛行士による当事者研究</p> <p>その他 東京大学工学系研究科先端学際工学専攻, 東京大学大学院学位論文(第18602号), 2020年3月</p>	野口 聡一	東京大学 工学系研究科先端学際工学専攻 非常勤助教	本論文は、元宇宙飛行士が自分自身の体験に基づいて、宇宙(ISS)での滞在が人間の身体・心理にどのような影響を与えるのかについて、そのような経験を持ちえない一般人にも分かる形で論じている。これまで宇宙について自然科学的・工学的な論文・解説は数多く公表されてきたものの、当事者が日記やISSと地球とのSNSの内容を分析するまでに至った例は見当たらない。個々のデータの分析手法そのものについては指摘すべき諸点が見られるが、提唱している仮説は興味深く、今後の検証が待たれる。民間宇宙旅行など一般人を対象とした宇宙ビジネスに関心が高まるなか、情報通信技術がますます重要な役割を担うことを示す一例として評価できる。

令和03年 第37回 特別表彰 論文番号:336

論文	著者	所属	評価
<p>【審査員推薦】さようなら、意味のない暗号化ZIP添付メール</p> <p>国内学会誌 情報処理学会, 情報処理, 2020年7月号別刷, 2020年6月</p>	<p>崎村 夏彦</p> <p>大泰司 章</p> <p>楠 正憲</p> <p>上原 哲太郎</p>	<p>NATコンサルティング合同会社 代表</p> <p>合同会社PPAP総研 代表</p> <p>国際大学 Glocom 客員研究員</p> <p>立命館大学 情報理工学部 情報理工学科 教授</p>	本稿は、メール添付時にZIP圧縮してから暗号化して送り、次のメールでその復号鍵を送る儀式は、技術的に有害無益と断じた啓蒙的解説集である。2020年11月の平井内閣府特命担当大臣による廃止推奨以降も多くの官庁や企業で使われ続けているので、病根究明は情報セキュリティの運用に関する学際研究として最大級のテーマと考える。しかし、本稿は、普及理由、止めない理由の解明には踏み込んでいない。真相解明に向けた今後の学際研究を期待する。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和03年 第37回 入賞 論文番号:321

論文	著者	所属	評価
<p>Measuring “Nigiwai” from Pedestrian Movement</p> <p>海外学会誌 IEEE, Access, 2021年2月</p>	<p>Mohamed A. Abdelwahab</p> <p>鍛冶 静雄</p> <p>堀 磨伊也</p> <p>高野 茂</p> <p>荒川 豊</p> <p>谷口 倫一郎</p>	<p>九州大学 持続的共進化地域創成拠点 学術研究員</p> <p>九州大学 マス・フォア・インダストリ研究所 教授</p> <p>九州大学 エネルギー研究教育機構 准教授</p> <p>九州大学 持続的共進化地域創成拠点 准教授</p> <p>九州大学 大学院システム情報科学研究院 教授</p> <p>九州大学 理事・副学長</p>	<p>本論文は、定点カメラの映像から得られる歩行者の移動軌跡をもとに算出される「賑わい」の指標を提案し、同指標を群衆シミュレータVadereから生成される軌跡データおよび実写ビデオMOT16-03とMOT16-04に適用することにより、その妥当性を検証している。テレコム学際研究賞に値する本研究によって得られた成果が、日本各地に活気ある商店街を構築する手段として広く活用されることを期待したい。</p>

令和03年 第37回 入賞 論文番号:325

論文	著者	所属	評価
<p>Gaze awareness and metacognitive suggestions by a pedagogical conversational agent: an experimental investigation on interventions to support collaborative learning process and performance</p> <p>海外学会誌 Springer, International Journal of Computer-Supported Collaborative Learning, 2020年12月</p>	<p>林 勇吾</p>	<p>立命館大学総合心理学部 准教授</p>	<p>本論文は、対面での協同学習においてお互いの視線・会話の重要性を、2者間の視線情報のリアルタイムフィードバックと会話エージェントという支援システムを用い、オンライン学習においても重要であること、両者の相乗効果が大いであることを立証した点が高く評価できる。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によるリモートワークが日常化してきており、協同作業の効率化が喫緊の課題であるところ、タイムリーな研究であり学際研究として優れている。</p>

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和03年 第37回 入賞 論文番号:322

論文	著者	所属	評価
Controlled Document Authoring in a Machine Translation Age 書籍 Routledge2020年10月	宮田 玲	名古屋大学・大学院工学研究科 助教	本書は、単なる機械翻訳ではなく、外国人住民を対象とする自治体での各種申請書類に焦点を絞って、よりの確な文書作成の支援としての機械翻訳システムを提案しており、膨大な作業を伴う実用的な研究成果として高く評価する。今後、行政のデジタル化の中でこの種の申請手続はデジタルに移行していくことになるが、この支援システムが申請システムのデジタル化に組み込まれていくよう引き続きの努力に期待する。

令和03年 第37回 奨励賞 論文番号:316

論文	著者	所属	評価
Dynamic Hawkes Processes for Discovering Time-evolving Communities' States behind Diffusion Processes KDD 2021 (27th ACM SIGKDD International Conference on Knowledge Discovery & Data Mining)2021年8月	大川 真耶 岩田 具治 田中 佑典 戸田 浩之 倉島 健 鹿島 久嗣	NTT サービスエボリューション研究所 研究員 NTT コミュニケーション科学基礎研究所 特別研究員 NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究員 NTT サービスエボリューション研究所 主幹研究員 NTT サービスエボリューション研究所 特別研究員 京都大学大学院 情報学研究所 知能情報学専攻 教授	本論文は、拡散過程の代表的なモデルであるHawkes過程を一般化した動的Hawkes過程を提案し、4種類のデータセットを用いてコミュニティの状態の時間的変化を推定し、近未来のイベントを高精度で予測できることを示している。既存のデータセットだけでなく、自ら収集したデータセットでも検証を行った点を高く評価する。本モデルは新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行の情報拡散等の分析にも利用でき、有用な結果である。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和03年 第37回 奨励賞 論文番号:332

論文	著者	所属	評価
<p>Unconscious Reinforcement Learning of Hidden Brain States Supported by Confidence</p> <p>海外学会誌 Macmillan Publishers Limited, part of Springer Nature, Nature Communications, Vol.11, 4229, doi:10.1038/s41467-020-17828-8 (2020), 2020年8月</p>	<p>Aurelio Cortese</p> <p>Hakwan Lau</p> <p>川人 光男</p>	<p>株式会社国際電気通信基礎技術研究所 脳情報通信総合研究所 行動変容研究室 主任研究員</p> <p>Professor, Department of Psychology, University of Hong Kong</p> <p>株式会社国際電気通信基礎技術研究所 脳情報通信総合研究所 所長</p>	<p>人間は無意識の情報を利用して行動を決めているが、その無意識な情報は多次元でありコンピュータ等では極めて選択するのが難しいと考えられる。本論文は、世界で初めてfMRIと情報技術により無意識の神経情報を用いて人間は学習できていることを実験的に確認した論文である。技術的に優れるとともに、人間の認知、行動のメカニズムを明らかにしていき、さらにはロボットには出来て人間には出来ない事等、今後学際的に発展が期待される論文である。</p>

令和04年 第38回 特例表彰 論文番号:312

論文	著者	所属	評価
<p>特集「インフォデミック時代のAIとサイバーセキュリティ」</p> <p>国内学会誌 映像情報メディア学会, 映像情報メディア学会誌, 2022年7月</p>	<p>越前 功</p> <p>馬場口 登</p> <p>笹原 和俊</p> <p>中島 悠太</p> <p>Trung-Nghia Le</p> <p>Huy Hong Nguyen</p> <p>山岸 順一</p> <p>Canasai Kruengkrai</p> <p>李 良知</p> <p>王 博文</p>	<p>国立情報学研究所 教授</p> <p>大阪大学 教授</p> <p>東京工業大学 准教授</p> <p>大阪大学 准教授</p> <p>国立情報学研究所 特任助教</p> <p>国立情報学研究所 特任研究員</p> <p>国立情報学研究所 教授</p> <p>国立情報学研究所 特任助教</p> <p>大阪大学 特任助教</p> <p>大阪大学 博士後期課程学生</p>	<p>本作は、シンセティック・メディアの負の側面の問題について、技術的観点からの検討のみならず、社会的観点ならびに法整備の現状をもカバーしており、「インフォデミック」を概観するにふさわしく、時宜を得た学際論文集である。学会誌の特集記事である点は審査員で評価が分かれたところであるが、フェイクメディアをいかに克服するか、という研究成果としての価値は高く特例表彰とした。</p>

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和04年 第38回 入賞 論文番号:314

論文	著者	所属	評価
I Hear My Voice; Therefore I Spoke: The Sense of Agency Over Speech Is Enhanced by Hearing One's Own Voice 海外学会誌 SAGE Publications Inc., Psychological Science, 2022年8月	大畑 龍 浅井 智久 今泉 修 今水 寛	東京大学大学院人文社会系 研究科心理学研究室 特任研究員 国際電気通信基礎技術研究 所(ATR)脳情報通信総合研 究所 認知機構研究所 認知 神経科学研究室 専任研究員 お茶の水女子大学人間発達 教育科学研究所 助教 東京大学大学院人文社会系 研究科心理学研究室 教授	本論文では、行為を行うもの(例えば話者)に対するフィードバックの 影響による行為主体感の変化を実験的に解明した。行為主体感を 高められるとより積極的な会話等になるという注目すべき結果を得て いる。このことは人間が制御する将来のロボット等ではなく、メタバ ースの時代にはいかに積極的に仮想空間で活動し仮想社会を活性化 することへ繋がると思われるユニークな研究であり、テレコム学際 研究賞にふさわしいと評価する。

令和04年 第38回 入賞 論文番号:315

論文	著者	所属	評価
Kiite Cafe: A Web Service for Getting Together Virtually to Listen to Music 国際会議 22nd International Society for Music Information Retrieval Conference (ISMIR 2021), Proceedings of the 22nd International Society for Music Information Retrieval Conference (ISMIR 2021), 2021年11月	佃 洸摂 石田 啓介 濱崎 雅弘 後藤 真孝	国立研究開発法人産業技術 総合研究所 主任研究員 国立研究開発法人産業技術 総合研究所 テクニカルスタッフ 国立研究開発法人産業技術 総合研究所 研究グループ長 国立研究開発法人産業技術 総合研究所 首席研究員	COVID-19以降、例えば友人と一緒に音声を聞きながら時間と空間を 共有することは減った。本研究で実現された“Kiite Cafe”はWeb上で 集まって、同じ曲を聴きながらコミュニケーションをするものである。5 か月以上の実験的研究の後に実用にも供し、その有効性は広く決め られ、いわば「文化」として根付いた。これは単なる学術研究で終わら ず、社会実装を通して新しい文化サービスをクリエーションした実学 として素晴らしい研究であり、テレコム学際研究賞にふさわしいと評 価する。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和04年 第38回 入賞 論文番号:316

論文	著者	所属	評価
研究利用可能な小論文データに基づく参照文書を利用した小論文採点手法の開発 国内学会誌 情報処理学会, 情報処理学会論文誌, 2021年9月	竹内 孔一 大野 雅幸 泉仁 宏太 田口 雅弘 稲田 佳彦 飯塚 誠也 阿保 達彦 上田 均	岡山大学学術研究院 自然科学学域 准教授 住友電工情報システム株式会社 テクニカル・コンサルタント 株式会社NTTデータ MSE 社員 岡山大学学術研究院 社会文化科学学域 教授 岡山大学学術研究院 教育学域 教授 岡山大学全学教育・学生支援機構 教授 岡山大学学術研究院 自然科学学域 教授 岡山大学学術研究院 自然科学学域 教授	本論文は、小論文の採点という教育現場において大変重要かつ負担の大きい課題について、現実的な自動採点手法を実装している点が高く評価できる。特に人文学、経済、科学をテーマに4,800件の答案データを構築し公開している点、それらを用いた評価実験の結果、手法の面でも先行研究を上回る高い性能を実現していることが評価できる。この分野の今後の発展の道を切り開いた作品であると言えることから、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。

令和04年 第38回 奨励賞 論文番号:310

論文	著者	所属	評価
Confidence modulates the decodability of scene prediction during partially-observable maze exploration in humans 海外学会誌 Nature Research, Communications Biology, 2022年4月	片山 梨沙 吉田 和子 石井 信	京都大学 大学院情報学研究所 博士後期課程1年 オックスフォード大学 Nuffield 医療神経科学部 博士研究員 京都大学 大学院情報学研究所 教授	本論文は、3次元空間における迷路探索課題をバーチャルリアリティゲームとして実装し、迷路内を移動中に脳内に構築されるシーン予測とその主観的確信度の両方が脳活動パターンから解読可能であることを示している。予測の確信度が高いほど、その予測を表現する脳活動がより明瞭になるという知見を見出した点を高く評価する。将来的にはブレイン・マシン・インターフェースを用いた情報通信技術への応用が期待される。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和04年 第38回 奨励賞 論文番号:303

論文	著者	所属	評価
<p>AI技術と集团的労働法上の課題—集团的利益調整の位置付けと不当労働行為制度の解釈に着目して—</p> <p>国内学会誌 労働開発研究会, 季刊労働法275号, 2021年12月</p>	岡村 優希	同志社大学 国際取引・国際法務研究センター 研究員	本論文は、経営者による雇用管理がAIによる雇用管理によって代替される場合の労働法上の位置づけに関し、個別的労働法ならびに集团的労働法の双方において、労働者性の成否(非雇用化)、不当労働行為の成否(不利益取扱いの意思の存否)などについて、機械学習と深層学習に分け、位置づけている論文である。人的組織が情報システムを介した場合の法的問題を鋭く解析しており、学際論文としてのオリジナリティがある。

令和05年 第39回 特例表彰 論文番号:322

論文	著者	所属	評価
<p>メタバースの教科書 原理・基礎技術から産業応用まで</p> <p>書籍 株式会社オーム社 2023年4月</p>	雨宮 智浩	東京大学大学院情報理工学 研究科 准教授	本書は、メタバースについて技術と理論を整理した専門書であり、概念や定義、歴史から未来予想図まで、人文学・社会科学分野と技術分野の両分野の視点から幅広く解説している。タイトルにあるようにあくまでも「教科書」であって研究論文ではないが、メタバースの分野における研究の発展を促す良書といえ、その価値は高いため特例表彰とした。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和05年 第39回 入賞 論文番号:303

論文	著者	所属	評価
Privacy-Preserving Collaborative Data Collection and Analysis With Many Missing Values 海外学会誌 Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE), IEEE Transactions on Dependable and Secure Computing, 2023年5月	清 雄一 J. Andrew Onesimu 奥村 拓史 大須賀 昭彦	電気通信大学 大学院情報理工学研究科 情報学専攻 教授 Karunya Institute of Technology and Sciences Assistant Professor 株式会社三菱総合研究所 ビジネス・コンサルティング部門 イノベーション・サービス開発本部 特命リーダー 電気通信大学 大学院情報理工学研究科 情報学専攻 教授	本論文は、欠損値を考慮した上でプライバシーを保護するデータ収集・解析基盤を提案し、既存手法と同一のプライバシー保護を実現しながら、統計データの精度を向上できることを医療系の公開データを用いて明らかにしている。提案手法は医療データ等の解析に不可欠な手法であり、その社会的意義も大きく、更なる研究の発展と今後の社会実装が期待される。

令和05年 第39回 入賞 論文番号:315

論文	著者	所属	評価
High-resolution image reconstruction with latent diffusion models from human brain activity 国際会議 The IEEE / CVF Computer Vision and Pattern Recognition Conference (CVPR)2023年6月	高木 優 西本 伸志	大阪大学大学院生命機能研究科 / 国立研究開発法人情報通信研究機構 助教 / 特別研究員 大阪大学大学院生命機能研究科 / 国立研究開発法人情報通信研究機構 教授 / 特別招へい研究員	本論文は、被験者への提示画像と機能的磁気共鳴データを用い、画像生成AIであるStable Diffusion (SD)を組み合わせてことにより、元画像に近い高精度な画像を再構成できることを示している。同時にSDの内部表現と脳活動に構造的な対応関係があることも示し、深層学習のメカニズム解明に一石を投じている。専門外にも読みやすく構成されているという意味でも、テレコム学際研究賞にふさわしい研究である。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和05年 第39回 入賞 論文番号:305

論文	著者	所属	評価
<p>D. Satoh and T. Mochida, Changes in calling parties' behavior caused by settings for indirect control of call duration under disaster congestion, IEICE Transactions, E105-A, No. 9, Article: 2021EAP1094 (2022.9) 1358—1371. https://doi.org/10.1587/transfu</p> <p>国内学会誌 電子情報通信学会, IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, 2022年9月</p>	<p>佐藤 大輔 持田 岳美</p>	<p>NTTネットワークサービスシステム研究所 主任研究員 NTTコミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員</p>	<p>本論文は、交換機の交換能力の10倍強の発呼があっても発呼可能な番号割り当てと人の行動変容により、一律の発信規制を採らずに輻輳回避するというテレコム学際研究賞にふさわしい提案である。大きな投資を避けつつ実効性があり、運用現場でも利用者に歓迎されるであろう。被災地の受信交換機の輻輳回避も大きな課題であるため、SIPプロトコルのダイナミズムを考慮した継続研究を望みたい。</p>

令和05年 第39回 奨励賞 論文番号:318

論文	著者	所属	評価
<p>It's my turn: empirical evidence of upstream indirect reciprocity in society through a quasi-experimental approach</p> <p>海外学会誌 Springer Nature Group, Journal of Computational Social Science, 2023年9月</p>	<p>大林 真也 稲葉 美里 大平 哲史 清成 透子</p>	<p>青山学院大学 社会情報学部 准教授 近畿大学 経済学部 講師 青山学院大学 附置情報メディアセンター 助教 青山学院大学 社会情報学部 教授</p>	<p>ある災害時に被災者支援を受けた経験のある者が、別の災害時に被災者を支援するボランティアとして活動し、助け合いの連鎖関係(正の因果関係)が見られるという社会的関係を、現実のスマホ・データを用いて明らかにしており、自然言語処理・因果推論をも利用した計算社会科学的な手法と情報通信技術を用いた例として、有意義な学際的研究である。</p>

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和05年 第39回 奨励賞 論文番号:312

論文	著者	所属	評価
Identifying influential brokers on social media from social network structure 国際会議 International AAAI Conference on Web and Social Media, Proceedings of the 17th International AAAI Conference on Web and Social Media (ICWSM 2023), 2023年6月	津川 翔 渡部 康平	筑波大学 助教 長岡技術科学大学 准教授	ソーシャルメディア上のインフルエンサーを抽出するという着眼点は興味深く、社会的にも経済的にも重要な研究論文である。本論文は他のユーザが発信した情報を多くのユーザに拡散するブローカーを機械学習技術を用いて特定する手法を提案した点、またICWSMというトップカンファレンスで採択されている点も高く評価したい。今後の更なる展開を期待したい論文である。

令和06年 第40回 特例表彰 論文番号:119

論文	著者	所属	評価
AIの世界へようこそ: 未来を変えるあなたへ 書籍 Gakken 2024年8月	美馬 のゆり	公立はこだて未来大学システム情報科学部 教授	本書は、小学校高学年から中学までの生徒向けに執筆されたAIについての啓蒙書である。これからAIとともに生きて行く生徒らにとって、AIの歴史や技術についての基礎知識を身につけ、AIをこれからどのように活用し、どのような社会をつくっていくかを考えることは重要である。簡潔で分かりやすい解説は小学校や中学校でのAIリテラシー教育に役立つことが期待され、社会的意義が大きいことから特例表彰とした。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和06年 第40回 特例表彰 論文番号:205

論文	著者	所属	評価
拡散モデル - データ生成技術の数理 書籍 岩波書店2023年2月	岡野原 大輔	株式会社Preferred Networks 代表取締役最高研究責任者	一般的にこのような最先端技術は洋書で出版され、研究者は英語で理解するか翻訳本を苦労して利用するが、本書は日本語で書かれた、わかりやすい素晴らしい教科書的な本である。著者は日本発のAIユニコーン企業の創始者であると同時に、啓もう活動にも多くの努力を払い、日本の多くの技術者を育ててきている。ちなみに、初心者は2024年末に出版された「生成AIの仕組み」(岩波書店)から読むのが理解が早い。啓もう活動を含め、著者の活動を特例表彰とした。

令和06年 第40回 入賞 論文番号:313

論文	著者	所属	評価
Decision uncertainty as a context for motor memory 海外学会誌 Springer Nature, Nature Human Behaviour, 2024年6月	小笠 希将 横井 惇 岡澤 剛起 西垣 守道 平島 雅也 羽倉 信宏	情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 研究員 情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 研究員 Institute of Neuroscience, Chinese Academy of Sciences チームリーダー 株式会社 本田技術研究所 先進技術研究所 チーフエンジニア 情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 研究マネージャー 情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 主任研究員	これまで独立と考えられてきた意思決定と運動のプロセスが脳内で連関していること、また脳は確実・不確実な状況を別々のものとして運動と結びつけ学習しているという脳の新たな情報処理様式を明らかにしている。認知科学、行動科学、スポーツ科学などの学際分野に新たな視点を提供すると共に、確実・不確実を組み込んだ新たな学習法の開発等に貢献することが期待され、テレコム学際研究賞にふさわしい研究である。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和06年 第40回 入賞 論文番号:324

論文	著者	所属	評価
Internet Service Providers' and Individuals' Attitudes, Barriers, and Incentives to Secure IoT 国際会議 32nd USENIX Security Symposium (USENIX Security 23), 32nd USENIX Security Symposium (USENIX Security 23), 2023年8月	藤田 彬 Nissy Sombatruan Tristan Caulfield Ingolf Becker 笠間 貴弘 中尾 康二 井上 大介	国立研究開発法人情報通信研究機構 サイバーセキュリティ研究所 サイバーセキュリティ研究室 主任研究員 ASML Senior Security Specialist University College London Associate Professor University College London Lecturer 国立研究開発法人情報通信研究機構 サイバーセキュリティ研究所 サイバーセキュリティ研究室 副室長 国立研究開発法人情報通信研究機構 サイバーセキュリティ研究所 主管研究員 国立研究開発法人情報通信研究機構 サイバーセキュリティ研究所 サイバーセキュリティ研究室 室長	日本国内のISPとユーザを対象にIoT機器に関するセキュリティ意識を大規模に調査した報告である。ステークホルダーへの社会的評価の重要性、政府の役割等、実効性のあるインセンティブ設計の必要性も述べている。日本のセキュリティ運用者の意識を高める行動経済学的アプローチの基礎データとして価値が高く、テレコム学際研究賞にふさわしいと高く評価する。

令和06年 第40回 入賞 論文番号:330

論文	著者	所属	評価
VisPhoto: Photography for People with Visual Impairments via Post-Production of Omnidirectional Camera Imaging 国際会議 The 25th International ACM SIGACCESS Conference on Computers and Accessibility (ASSETS 2023), Proceedings of the 25th International ACM SIGACCESS Conference on Computers and Accessibility (ASSETS 2023), 2023年10月	平林 直樹 岩村 雅一 程 征 南谷 和範 黄瀬 浩一	ヤフー株式会社 なし 大阪公立大学 大学院情報学研究科 基幹情報学専攻 准教授 住友電装株式会社 なし 大学入試センター 研究開発部 教授 大阪公立大学 大学院情報学研究科 基幹情報学専攻 教授	全盲でも一人で写真撮影できるVisPhotoの提案は、ダイバーシティ&インクルージョンの社会での開発者のやさしさを感じさせる。新奇な技術を使用しているわけではないが、社会的価値は申し分なく、ASSETS2023でBest Paper Awardを受賞している。ぜひ商品化して、多くの視覚障害者にInstagramを楽しんでもらいたい。そのようなことから、テレコム学際研究賞にふさわしいと高く評価する。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和06年 第40回 奨励賞 論文番号:305

論文	著者	所属	評価
Lyric App Framework: A Web-based Framework for Developing Interactive Lyric-driven Musical Applications 国際会議 The 2023 ACM CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, CHI '23: Proceedings of the 2023 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, 2023年4月	加藤 淳 後藤 真孝	国立研究開発法人産業技術総合研究所 主任研究員 国立研究開発法人産業技術総合研究所 首席研究員	本作品は、ミュージックビデオを対象とした歌詞表現のためのリリックアプリに関する論文である。提唱しているリリックアプリを公開し、それを用いたプログラミングコンテストを毎年開催することで、音楽とプログラミングの将来のための実装的知見を得るとともに、創作ジャンルの垣根を超えた創造性支援を提供したという点を高く評価し、テレコム学際研究賞にふさわしいとした。

令和06年 第40回 奨励賞 論文番号:310

論文	著者	所属	評価
Analytically Tractable Models for Decision Making under Present Bias 国際会議 The 38th AAAI Conference on Artificial Intelligence (AAAI-24), Proceedings of the 38th AAAI Conference on Artificial Intelligence, 2024年2月	赤木 康紀 丸茂 直貴 倉島 健	日本電信電話株式会社 人間情報研究所 研究員 東京大学 大学院情報理工学系研究科 数理情報学専攻 特任助教 日本電信電話株式会社 人間情報研究所 特別研究員	人間の現在バイアスによる行動を予測・分析し最適な介入を導出するという行動経済学の分野の研究である。提案した閉じた形式の数理モデルは、目標設定や報酬スケジュールの最適化を現実的な時間で解け、学術的価値は大変高い。よって、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。今後は情報通信のセキュリティ運用等の現実問題に適用して、社会的価値のある成果を期待する。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和07年 第41回 入賞 論文番号:306

論文	著者	所属	評価
Feedback from an avatar facilitates risk-taking by modulating the amygdala response to feedback uncertainty 海外学会誌 Public Library of Science (PLOS), PLOS Biology, 2025年4月	田中 敏子 春野 雅彦	情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 主任研究員 情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター 室長	対峙相手が人間かアバターかによってリスク選好行動が変化するという仮説を、フィードバック不確実性という単一の潜在変数に還元し、行動および脳活動の双方から検証した点に特徴がある。特に、アバターの顔表情がリスク選択を促進し、その効果が扁桃体の不確実性応答に基づくことを示した点は、計算神経科学的に意義深く、テレコム学際研究賞にふさわしい研究である。

令和07年 第41回 入賞 論文番号:334

論文	著者	所属	評価
IntelLA: Intelligent Language Learning Assistant for Assessing Language Proficiency Through Interviews and Roleplays 国際会議 25th Annual Meeting of the Special Interest Group on Discourse and Dialogue (SIGDIAL), Proceedings of the 25th Annual Meeting of the Special Interest Group on Discourse and Dialogue (SIGDIAL), 2024年9月	佐伯 真於 高津 弘明 倉田 楓真 鈴木 駿吾 江口 政貴 松浦 瑠希 瀧澤 嵩太朗 吉川 禎洋 松山 洋一	早稲田大学 大学院 基幹理工学研究科 情報理工学専攻 博士後期課程 株式会社エキュメノボリス リサーチ・サイエンティスト 早稲田大学 大学院 基幹理工学研究科 情報理工学専攻 修士課程 早稲田大学 GCS研究機構 知覚情報システム研究所 次席研究員 早稲田大学 GCS研究機構 知覚情報システム研究所 次席研究員 早稲田大学 大学院 基幹理工学研究科 情報理工学専攻 修士課程 早稲田大学 大学院教育学研究科 教科教育学専攻 博士後期課程 株式会社エキュメノボリス リサーチ・エンジニア 株式会社エキュメノボリス 代表取締役	英語スピーキング能力判定のためのマルチモーダル対話システムを開発している。システム主導型インタビューと混合主導型ロールプレイを通して収集した発話データから、表現の幅、正確さ、流暢さ、やりとり一貫性、音韻の6細目をCEFRに準拠して推定している。日本全国の初等から大学までの教育機関において多数の学生に利用されている実績を踏まえ、テレコム学際研究賞にふさわしいと高く評価する。 ※CEFR:Common European Framework of Reference for Language

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和07年 第41回 奨励賞 論文番号:310

論文	著者	所属	評価
Perceiving Synchrony: Determining Thermal-Tactile Simultaneity Windows 海外学会誌 IEEE, IEEE Transactions on Haptics, 2024年9月	城代 拓哉 Lynette A. Jones 寺尾 将彦 Ho, Hsin-Ni	九州大学 大学院芸術工学研究所 テクニカルスタッフ マサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology) 機械工学科 シニアリサーチサイエンティスト 山口大学 時間学研究所 講師 九州大学 大学院芸術工学研究所 准教授	温度感覚と触覚の主観的同時性を明らかにすべく、親指の付け根に+5℃の温度刺激とハルス触覚刺激を様々な時間差で与えるシステムを構築し、13名の試験者により刺激タイミングの影響を定量的に評価している。温度刺激が触覚刺激より約0.5秒先行したときに最も同時に感じられるなどの結果を得ている。得られた知見は、感覚情報の伝送などの研究の発展に資することから、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。

令和07年 第41回 奨励賞 論文番号:326

論文	著者	所属	評価
Reducing sexual predation and victimization through warnings and awareness among high-risk users 海外学会誌Springer Nature, Journal of Computational Social Science, 2025年6月	高野 雅典 西口 真央 鳥海 不二夫	株式会社サイバーエージェント 学際的情報科学センター リサーチラー 東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻 研究員 東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻 教授	若年利用者の多い大規模SNSを対象に、機械学習とランダム化比較試験を組み合わせて長期の介入を行い、持続的に性的被害や加害を抑制する実証的エビデンスを提示している。効果は部分的な支持にとどまり、介入手法の一層の改善を示唆するものだが、プラットフォーム運営主体と研究者が協働し、ユーザー負担および運営者のコストを含めた実現可能性を探っており、その社会的意義からも、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。

電気通信普及財団賞(テレコム学際研究賞)受賞論文

令和07年 第41回 奨励賞 論文番号:333

論文	著者	所属	評価
<p>EarHover: Mid-Air Gesture Recognition for Hearables Using Sound Leakage Signals</p> <p>国際会議 UIST' 24: Proceedings of the 37th Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology, 2024年10月</p>	<p>鈴木 俊汰</p> <p>雨坂 宇宙</p> <p>渡邊 拓貴</p> <p>志築 文太郎</p> <p>杉浦 裕太</p>	<p>慶應義塾大学 理工学部 情報工学科 学部4年</p> <p>慶應義塾大学 理工学部 訪問研究員</p> <p>北海道大学 情報科学研究科 助教</p> <p>筑波大学 システム情報系 教授</p> <p>慶應義塾 理工学部 情報工学科 准教授</p>	<p>従来ノイズとして扱われてきたヒアラブルデバイスの音漏れを能動的な入力信号源として利用するという独創的な発想に基づくものである。中でもジェスチャ分類への適用は同氏が初めて行い、その完成度が高く評価できる。HCI分野のトップ国際会議の一つであるUISTでのBest Paper Awardを受賞している点も国際的な評価の高さを示しており、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。</p>